

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：24501

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12207

研究課題名（和文）タイ上座仏教海外派遣僧プログラムの布教方針とその英国における実践形態の分析

研究課題名（英文）Policies of the Overseas Missionary Monk Training Programmes in Thai Theravada Buddhism and their Implementation in the United Kingdom

研究代表者

小布施 祈恵子（OBUSE, Kieko）

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：90719270

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では欧米で布教活動を行うタイ上座仏教僧侶の多くが受講している海外派遣僧プログラムに見られる布教方針を分析した。その結果、プログラムの目的は海外在住のタイ仏教徒コミュニティの宗教・文化的ニーズのサポートと、海外における改宗者の獲得という二重構造をなしているが、改宗者の獲得が近年重要性を増していること、そしてこの傾向が近年タイ国内のみならずミャンマーやスリランカでも見られる、イスラームが仏教の存在を脅かしているという言説に基づいていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究を通して判明した点の中で、海外派遣僧プログラムが新たな改宗者の獲得を主な目的とし始めていること、そしてその背景イスラームが仏教の脅威であるという言説があることは特に注目に値する。この言説は植民地時代の英国人研究者によって作られた「ムスリムによるインド仏教の破壊」という説を継承するものであり、現代の仏教徒とムスリムの関係における歴史認識の問題の大きさを物語っている。また、タイ国内の反イスラームの動きが他の上座仏教国におけるそれと連動している点も、タイ仏教界の今後の活動、および東南アジアにおける仏教徒とムスリムの関係性を理解してゆく上で欠かせない要素である。

研究成果の概要（英文）：This research project examined the policies of the Overseas Missionary Monk Training Programme, attended by many of the Thai Theravada Buddhist monastics who are engaged in the dissemination of Buddhism overseas. The programme has a dual purpose of supporting the religious and cultural needs of the Thai Buddhist diaspora communities and of acquiring converts overseas, and the importance of acquiring converts has assumed particular importance in recent years. This may be attributed to the view of Islam being a threat to Buddhism, which has been spreading in Thailand as well as Myanmar and Sri Lanka.

研究分野：宗教学

キーワード：上座仏教 海外布教 タイ 土着化 イスラーム 東南アジア イスラモフォビア 宗教間対話

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化がすすむ現代、宗教文化の越境は移民や組織的布教活動の拡大に伴い一段と加速している。中でも仏教は20世紀後半からアジア文化圏外で急速に広まっており、特に欧米における仏教受容に関しては活発に研究がなされている。タイ上座仏教も例外ではなく、1960年代からの移民増加にともない欧米には仏教寺院が多数設立されている。例えば米国には現在100近いタイ仏教寺院があり、タイ出身の僧侶が多数指導にあたっている。彼らの多くはタイの仏教大学が開講する海外派遣僧プログラムを修了した「海外派遣僧」(タイ語: phra thammathuut saai taang pratheet) であるが、これに関するまとまった研究はなかった。

この海外派遣僧プログラムに関する知見の欠如は、欧米における上座仏教受容に関するこれまでの研究における視点の偏りを反映している。現代世界における仏教の広まりに関する先行研究ではその対象が移民であれ現地の改宗者であれ、仏教が新しく根づく場所、つまり受容者側、の状況に焦点が当てられており、指導者である僧侶たちの活動も取り上げられるが、それはあくまで派遣先での活動であって、彼らを「送り出す」側における動向は考慮されていなかった。

### 2. 研究の目的

本研究では1970年代から欧米で加速している上座仏教の布教活動およびその受容形態の包括的理解のために、欧米で布教活動を行うタイ上座仏教僧侶の多くが受講している海外派遣僧プログラムに見られる布教方針と、実際の布教活動における同プログラムの役割を解明する。具体的にはタイ国立マハーチュラロンコーン仏教大学が開講する海外派遣僧プログラム設立・発展の経緯を解明し、そのカリキュラム(特に仏教の「土着化」、つまり布教対象地の文化・社会に即した教えの再解釈や実践形態の改変、に関する内容)の特徴を特定した上で、タイ国サンガの海外布教に関する方針を分析する。さらにプログラム修了後英国に派遣された僧侶の活動のケーススタディを行い、プログラムが彼らの活動にどのような影響を与え、また彼らの経験・知識がプログラムにどのように還元されているかに着目しつつ、プログラムの成果と課題、および今後の展望を多角的に考察する。

本研究では宗教文化の越境および受容過程の理解には「受け入れ」側の状況だけではなく、指導者を「送り出す」側に関する知見が重要であるとの立場を取る。「送り出し国」の方針を考慮することにより、受容地における動向のより多角的な理解が可能になるからである。また「送り出し国」の海外布教の動機や方針の変遷を国内外の政治・社会的状況に照らして分析することにより、当該国・組織の今後の海外布教活動の方向性の検討が可能になる。これらのことをふまえて本研究では上座仏教の海外布教における指導者の「送り出し国」における組織的試みに注目し、次の3つの根本的問題を解明することを目的とする。(1) タイ国サンガの海外布教の動機・方針をどのようなもので、それはどのように海外派遣僧プログラムに反映されているか。(2) プログラムは修了者のその後の活動においてどのような役割を果たしており、彼らの経験はプログラム内容にどのように還元されているか。(3) 欧米での布教におけるプログラムの成果と課題、および将来の展望はどのようなものであるか。

### 3. 研究の方法

本研究は上座仏教指導者を海外に「送り出す」の試みの例として、タイの上座仏教二派のうち多数派であるマハーニカーイ派に属するマハーチュラロンコーン仏教大学が運営する海外派遣僧プログラムを取り上げた。2018年の研究開始時点で予定していた本研究の内容および方法は以下の通りである。

#### (1) 海外派遣僧プログラム設立と発展の経緯(2018年度)

まずマハーチュラロンコーン仏教大学の海外派遣僧カレッジ(タイ語: wityaalai phra thammatuut、英語: Dhammaduta College)の運営関係者に聞き取りを行う。またプログラムに関する出版物(受講者用の資料、プログラムの周知書、新聞・雑誌の記事やインターネット上の情報など)を閲覧する。これらをもとにここでは主に以下の点を解明する。

海外派遣僧カレッジはどのような経緯・目的で設立されたのか。このカレッジのプログラムの前身となる試みが1960年代半ばに行われているが、これが継続されなかったのはなぜか。また1995年に同カレッジを設立して海外派遣僧プログラムを開講し、あらためてタイ仏教の海外布教活動を組織的に展開するという決定の背後にはどのようなタイ国外の政治・社会的状況があったのか。欧米における仏教人気の高まりはこの決定に寄与したか。

プログラムの枠組みはどのように決定されたのか。参考とした先例はあったのか。例えば同じ上座仏教社会であるスリランカでは20世紀初めに海外布教のために仏教僧侶を養成するプログラムが設立された(Kemper 2005: 34f)が、これは参考にされたか。

プログラムの受講・修了者数、実際の海外派遣者数および派遣先はどのように推移してきたか。推移の主な要因は何か。派遣者・派遣先はどのようなプロセスを経て決定されるか。

#### (2) 海外派遣僧プログラムの内容の特徴(2019年度)

次にプログラムにおける現在、および過去の指導者に聞き取りを行う。またプログラムのカリキュラムに関する資料を閲覧した上でプログラムを見学し、調査時点におけるプログラム受講者

に受講内容に関する聞き取りを行う。ここでは以下の点を解明する。

プログラムのカリキュラムはどのようなものか。仏教の教義や実践内容では何が強調されているか。実践形態を布教対象地の文化・社会慣習に合わせて調整する「土着化」に関する指導はあるか。律の遵守（食事を在家信者の布施に頼ること、女性との接触を避けること、車の運転をしないことなど）に関してどのような方針が提示されているか。

プログラムで想定されている主な布教対象は仏教のバックグラウンドを持たない人々か、それともタイ人コミュニティか。タイからの移民の2世、3世への布教方法は考慮されているか。このように異なる布教対象に関してどのような「戦略」が提示されているか。

プログラム設立以来カリキュラムはどのように変化してきたか。その要因は何か。過去の修了者の経験や知識はカリキュラムの内容に取り入れられているか。またその結果をもとに、タイ国サンガの海外布教活動の方針に関して、どのような特徴を指摘できるか。

#### (3) 海外派遣僧プログラム修了者の活動(2020年度)

最後に同プログラムを修了後英国で活動する僧侶を対象に、聞き取りと参与観察、関連資料の検討に基づくケーススタディを行う。調査対象地はバーミンガムとマンチェスターであるが、これはバーミンガムの寺院の設立者がマンチェスターの寺院の設立に携わった経緯がありプログラム修了者間の協力体制の重要な事例となるからである。英国に注目するのは欧米で最初のタイ寺院が同国に設立され現在も多くの実践者がいること、また比較的寺院が近接しており寺院の相互関係性の調査が容易であることによる。ここでは以下の点を解明する。

対象者の経歴はどのようなものか。プログラム受講の動機はどのようなもので、プログラム修了後どのようなプロセスを経て海外に派遣されたか。派遣先はどのように決定されたか。

対象者の派遣先での活動はどのようなものか。現地の宗教や文化をどのように扱っているか。実践内容の「土着化」をどの程度行い、律の遵守に関してどのような工夫・改善を行っているか。タイからの移民と現地の改宗者に対してどのように指導法を調整しているか。またこれらの方針はどの程度プログラムの指導内容に沿ったものであるか。さらにプログラム修了者同士の派遣後の関係はどのようなものか。相互協力はどの程度行われているか。

対象者は海外派遣僧カレッジとどのような関係を保っているか。派遣先での活動に関する報告義務や審査はあるか。派遣先で得た経験や知識はプログラムの内容に反映されているか。例えば修了者がプログラムの講師に呼ばれることはあるか。またすべての結果をふまえて、海外派遣僧プログラムの成果と課題、および将来の展望はどのようなものであるといえるか。

## 4. 研究成果

上記の研究計画の(1)と(2)の調査の結果、以下のことが判明した。

(1) まず海外派遣僧プログラムの前身となるプログラムが1960年代に始まった背景には、欧米における仏教への関心の高まり、およびタイから欧米への移民の増加がある。これは特に英国における初のタイ仏教寺院の開設とプログラムの開講が同時期であったことから明らかである。また当時タイ国内では共産主義の拡大を抑える目的で仏教の布教活動がなされており、本研究の対象である海外布教プログラムがその一環であった可能性もある。一方このプログラムが継続されなかった理由としては、複数の関係者が経済的な事情を指摘したが、これに加えてプログラムを共同で行っていたタイ仏教の2宗派の間で方向性の折り合いがつかなかったことや、反共産主義政策の必要性が減少したと認識された可能性も考えられる。また1995年に宗派ごとに海外布教プログラムが再開された背景には、主に欧米における仏教実践のさらなる広がりがあった。特にタイからの移民が仏教寺院を建て、タイ本国から僧侶を呼び寄せようとするパターンが増えたことにより、海外で指導ができる僧侶に対するニーズが増加したことが大きいと考えられる。

(2) カリキュラムの目的は海外(主に西洋)に移住したタイ仏教徒コミュニティの宗教・文化的ニーズのサポート、およびこれらの国々における改宗者の獲得といういわば二重構造をなしているが、現行のカリキュラムではこれらの目的に特化した内容は特に設定されていない。特に二つ目の改宗者の獲得という点に関しては運営者の期待通りの成果があがっておらず、このため現在大学院レベルのプログラムの設立に向けた大幅なカリキュラム改革が行われていることが関係者により示唆された。さらにこれと関連して改宗者の獲得、つまり仏教徒の数を増加させるということがプログラム運営の目的として近年重要性を増してきており、この傾向が少なくとも部分的に、タイ国内のみならず東南・南アジアの仏教社会において近年広がりつつある、イスラームが仏教の存在を脅かしていると言説に基づいていることが明らかになった。またタイ国サンガの活動の方針が近隣の上座仏教諸国(特にミャンマーとスリランカ)における動向に少なからぬ影響を受けており、海外派遣僧プログラムもその例外ではないことが判明した。

研究機関の3年目にあたる2020年度以降は、COVID-19パンデミックの影響により現地調査を行うことができなかつたため、適宜文献調査中心の研究に切り替えた。新しい研究内容と、その結果判明した点は以下の通りである。

まず2020年度は主に英国におけるマハーニカイ派僧侶の最近の活動の動向を分析する作業を行った。英国におけるマハーニカイ派の寺院および僧侶の統括組織であるThe Council of Thai Buddhist Monks of the United Kingdom and Irelandは、近年他国の布教拠点との連携を深め、共同で布教方針を発表したりしている。こうした「布教ネットワーク」の確立・補強は海外布教

の拡大を目指す動きとして注目される。一方英国内における在家実践者の寺院との関わりについては、先行研究で指摘されてきた積徳行為のために寺院に出入りする移民コミュニティと、主に瞑想の実践に関心を持つ英国人の改宗者・実践者という差異は確かに見られるものの、移民コミュニティにはタイだけでなくミャンマーなどの東南アジアの近隣国出身者が混じっており、これらのグループの「棲み分け」のダイナミズムは複雑である。さらにミャンマー人の在家実践者のいる「タイ」寺院では、ミャンマーのシャン州出身の僧侶が指導の中心となっている事例があり、これらの僧侶はタイ人とミャンマー人両方の在家者のニーズに対応している。タイ本国の海外派遣僧プログラムの運営にもシャン州出身の僧侶が関わっており、タイ仏教の海外布教活動におけるシャン州出身者の役割は小さくない。

また研究延長期間（1回目）となった2021年度は、海外派遣僧プログラムにおいて改宗者の獲得という目的が近年特にクローズアップされるようになった経緯を、現在南・東南アジアで広がりつつあるイスラームが仏教の存在を脅かしているという言説をふまえて検討した。タイ国内における仏教保護運動は常に何らかの内的・外的「脅威」の概念を想定して展開されており、外的脅威としては、1980年代の反カトリック運動が現在の反イスラーム感情のいわば前身であること。一方内的脅威としては仏教僧の墮落等が指摘されるが、サンガ組織は外的脅威を強調する傾向にある。またこのような反イスラーム感情を持つサンガ関係者が、同じ上座仏教多数派社会であるミャンマーやスリランカで同様の見解を表明している仏教指導者との協力体制を築く動きもある。これはイスラームが仏教の脅威であるという言説がこれらの上座仏教社会の間で相互に強化されている可能性を示唆している。さらに、このような外的脅威を想定した仏教保護運動は、主にこれらの国々で英国に対する反植民地・帝国主義運動として19世紀におこった仏教復興運動と共通する性格を持つ。したがって現在の反イスラームの動きに基づく海外仏教布教強化の方針は、19世紀の植民地時代から国民国家の確立のプロセスを経て現在に続く仏教ナショナリズムの流れの一部としてより通時的に分析する必要があると考えられる。

さらに研究延長期間（2回目）となった2020年度は、2021年度に行った考察をふまえてタイ国内の仏教徒とムスリムの関係を概観しつつ、宗教間対話等ムスリムとの関係改善に関するタイ仏教界の近年の活動に見られる傾向とその変遷を分析した。タイ国内の仏教徒とムスリムの関係は2004年に南部で起こった武力衝突を機に悪化したが、これを受けてさまざまな対話のイニシアチブが取られ始めた。対立の緩和を目的とする対話はキリスト教徒の仲介で行われることも多かったが、2013年に仏教徒とムスリムの相互理解を促進する International Center of Buddhist-Muslim Understanding が国立マヒドン大学に設置され、定期的に対話を兼ねた国際学会を開催した。しかし同センターが仏教側からの反発と思われる理由などによって2019年に閉鎖して以来、仏教とイスラームに特化した対話の継続的なプロジェクトは行われておらず、仏教徒とムスリムの関係の改善への動きは弱まっていると言える。その一方で国内でのムスリムの社会・政治的勢力の拡大に対する問題意識は相変わらず高く、イスラームを仏教の脅威とみなして仏教保護（特に仏教の国教化）を求める声が、サンガ関係者・在家仏教徒両方の間であげられ続けている。今後のタイ仏教界内のイスラームに関する言説及び海外布教の政策は、タイ国内（特に南部）の共存状況に加え、同じ上座仏教が多数を占めるミャンマーやスリランカでの動向と連動してゆく可能性が高いため、東南アジアと南アジアをつなぎ、グローバルなレベルでの宗教言説をも考慮した、超地域的な視点から考察してゆく必要があると思われる。

今回の研究を通して判明した点の中で、海外派遣僧プログラムがこれまで重要であった国外のタイ人コミュニティのサポートに加えて、新たな改宗者の獲得を主な目的とし始めていること、そしてその背景イスラームが仏教の脅威であるという言説があることは特に注目に値する。この言説は植民地時代の英国人研究者によって（文献の拡大解釈の結果）作られた「ムスリムによるインド仏教の破壊」という説（Truschke 2018）を継承するもので、現代の仏教徒とムスリムの関係における歴史認識の問題の大きさを物語っている。また、タイ国内の反イスラームの動きが他の上座仏教国におけるそれと連動している点も、タイ仏教界の今後の活動を理解する上で欠かせない要素である。仏教徒とムスリムの関係に関する先行研究は、歴史的流れを論じたものか特定の国や地域に特化した人類学的なものが中心となっている。今後は現代世界における宗教言説の創出について、通時的な視点を大切にしつつ、国家や地域間の差異やその影響関係をもふまえた分析を展開していくことが必須だと思われるが、現在その試みとして仏教徒とムスリムの相互認識の変遷と多様性に関する単著を執筆中である。

#### 参考文献

- Kemper, Steven, "Dharmapala's Dhammaduta and the Buddhist Ethnoscape," in Learmann, Linda, ed., *Buddhist Missionaries in the Era of Globalization* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2005), 22-50.
- Audrey Truschke, "The Power of the Islamic Swords in Narrating the Death of Indian Buddhism," *History of Religions* 57: 4 (2018), 406-435.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kieko Obuse	4. 巻 10:7
2. 論文標題 Living Compound Marginality: Experiences of a Japanese Muslim Woman	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Religions	6. 最初と最後の頁 434
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/rel10070434	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 小布施祈恵子
2. 発表標題 仏教とイスラーム：17世紀以前の相互言及における「仏陀」と「預言者」に注目して
3. 学会等名 龍谷大学世界仏教文化研究センター講演（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kieko Obuse
2. 発表標題 Allah as Amida: A Japanese Pure Land Buddhist 's Engagement with Islam
3. 学会等名 International workshop "Neither Near Nor Far: Encounters and Exchanges between Japan and the Middle East," Middle East Centre, St Antony 's College, University of Oxford, 24-26 May, 2019（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kieko Obuse
2. 発表標題 We Want to Increase the Buddhist Population ' : History and Objectives of the Overseas Missionary Monk Programmes in Thai Theravada Buddhism
3. 学会等名 British Association for the Study of Religions Conference, Leeds Trinity University, 2-4 September, 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kieko Obuse
2. 発表標題 Thailand as the New Nalanda: Global Buddhist Mission and Dialogue with Muslims
3. 学会等名 Public lecture, the School of Religious Studies, McGill University, 8 January, 2020 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kieko Obuse
2. 発表標題 Locating Toshihiko Izutsu within the Contemporary Buddhist-Muslim Doctrinal Engagement
3. 学会等名 国際会議「井筒俊彦の東洋哲学を再定置する」於国立民族学博物館(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西尾 哲夫、東長 靖編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 中東・イスラーム世界への30の扉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------